連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部長 鹿毛敏夫教授の「有馬晴信～肥前国のアジアン大名～」が掲載

●大分合同新聞朝刊　2026年6月24日(水)

大友時代を生きた人々

鹿毛　敏夫

有馬晴信

肥前国のアジアン大名

有馬家は、肥前国の有間荘（長崎県南島原市）をルーツとする中世の武家です。島原半島南部に勢力を持ち、室町時代後半の有馬晴純の代に12代将軍足利義晴に接近して家格を上げ、また次男純忠に大村家家督を継がせて勢力を拡大させました。晴純の跡は、子の義貞、孫の義純が継承しますが、1571（元亀2）年に義純が急死して弟の晴信がその跡継ぎに。晴信の生年には61（永禄4）年説と67（同10）年説がありますが、いずれにしてもまだ幼少の当主でした。

晴信は、初名を鎮純、その後、鎮貴、久賢などと何度も改名します。これは、大友義鎮と島津義久という九州の二大大名の「鎮」「久」の一字を受けたもので、若い頃の晴信が大友氏と、やがて島津氏が勢力を拡大すると同氏と主従関係を結んでいたことを示します。

島原半島の南端には、口之津という西九州随一の天然の要港があります。有明海の内海と東シナ海の外洋の境目に位置するこの港には、特に1560～70年代にポルトガル船も頻繁に入港しました。その頃、同じ肥前国で版図の拡大を図る龍造寺氏の攻撃に窮した晴信は、そのヨーロッパ勢力に目を付けます。

ルイス・フロイスの「日本史」によると、晴信は、80（天正8）年に口之津に入港したポルトガル船から鉛と硝石を確保しています。これは、イエズス会の巡察師アレッサンドロ・バリニャーノとの協定によるもので、晴信はマカオ在住のポルトガル商人を介して、対龍造寺戦に必要な鉄砲の弾丸と火薬の原料を手に入れたのです。同年、晴信は受洗して「プロタジオ」の洗礼名を受けます。居城日野江城の城下には、10代の若者が学ぶセミナリオ（神学校）も営まれます。

晴信の支援の下、イエズス会が経営した有馬のセミナリヨ（オ）跡

その後も晴信はバリニャーノの発案を受け、82（天正10）年に叔父の大村純忠、主家の大友義鎮との3人名義で、天正遣欧少年使節をヨーロッパに派遣。さらに江戸時代には、徳川家康の指示の下、台湾に使節を遣わして、豊臣秀吉の朝鮮出兵以来断絶していた、中国明王朝との国交回復の糸口を探ります。江戸時代初期に晴信が幕府の許可を得て海外に派遣した朱印船は7艘に及び、それぞれマカオ、ベトナム、カンボジア、タイでの貿易に従事して莫大な利益を得ています。

石高4万程度の島原という狭い版図でありながら、16世紀後半から17世紀初めにかけての日本の大航海時代に、外国貿易のうまみを最も効率よく吸収したアジアン大名、それが有馬晴信でした。

（名古屋学院大学国際文化学部長・教授）

＝月1回掲載＝